

論考●特集●宇宙

物語と宇宙の謎かけ

竹宮恵子 (漫画家、京都精華大学学長)
Keiko TAKEMIYA



1950年徳島県生まれ。67年『COM』に「この頃の友情」を投稿し、月例新人賞に佳作入選。68年、『週刊マーガレット』の新人賞に佳作入選した「リングの罪」でデビュー。1980年、代表作『風と木の詩』『地球へ…』で小学館漫画賞(両作品は共にアニメ化されている)、2012年、全作品と活動に対して日本漫画家協会賞文部科学大臣賞受賞。少女マンガだけでなく少年マンガや企業マンガなどさまざまなジャンルで活躍。文章では理解しにくい情報をマンガで描く「機能マンガ」や、後世に伝えるために史料性の高い極めて原画に近い複製を制作するプロジェクト「原画」(ダッシュ)の活動などを行っている。2000年京都精華大学マンガ学部教授に就任、漫画家として日本初の大学専任教員となる。2014年より同大学学長。



図1 『ジルベスターの星から』より ©竹宮恵子

出会い

私が子どもだったころ、地球の外はマンガの中にしかなかった。星空に浮かぶ宇宙船も宇宙ステーションも「所詮マンガでしょ」と言わんばかりの略画でできていたし、リアリティとはほど遠かったが、だからこそ想像の羽を伸ばせる猶予があった

とも言える。そのうきくさい「宇宙」がにわかに身近になったのは「スペースニク」と「イケヤ・セキ彗星」のせいである。学校で上映されたドキュメンタリー映画がさらにそれを加速した。2人の日本人名が付けられた彗星、それがニュースを知った瞬間も、地球の外で飛んでいるという事実。アマチュアの手で作られる天体望遠鏡のレンズとはてしない情

熱が、手の届かないものに触れるという飛躍をなすうることを知った。時速1,700kmで自転し、秒速29.8kmで公転している地球上に自分が立っていることも知らないころのことである。

それから考えると、その後10年間の宇宙についての発見や発展は目覚ましい。アポロ計画に始まって、スペースシャトル計画に至るあいだに、あっという間に世間は、宇宙ステーション計画まで普通のこととして理解するようになった。それがまだ人間の未来計画のなかであって、克服できなさそうな問題があるとしても、いずれは間違いなくそうなる未来として思い描いている。地球の外はもうマンガの中の絵空事でなく、身近な生活の問題として、すでに人々の心の中に描かれるようになったのだ。

それでも人は、いつも星空を見上げてはいない。日常の損得や苦勞に追われ、いつしか時速1,700kmのことは忘れるのだが、現実のみを見る人よりも、かすかでもそのことを頭の片隅に置いている人の方が、おそらく心は強いと私は信じる。

宇宙は謎の宝庫

宇宙は、知れば知るほどに謎である。謎の根源と言ってもいいかもしれない。人類の来し方、行く末を知るために宇宙を探求すると言うのなら、哲学的には謎であって当然なのかもしれないが、ブラックホールを利用してスイング・バイなどという言葉聞いては、そんな、まさに天文学的な大きさのエネルギーを、独楽回しみたいなスケールに持ち込んでいいのか!?と呆れてしまう。そう



図2 『アンドロメダ・ストーリーズ』より「星々の流れ」 ©竹宮恵子

しなければ解き明かせない大きさ、それが宇宙なのかもしれないが、漫画家の脳みそからすれば、それは何と言っても無条件のおもしろさとなる。謎の根源であることもさることながら、そこに想像の中であれ漕ぎ出て、仮にも宇宙空間で生活し冒険し、新たな地平を夢見られることは、復興や高度成長や受験戦争から離れ、それこそ「想像の翼を広げて」自由に泳げる空間として確保できるものだった。むろん、いくら雑学家が身上の漫画家といえど、科学的根拠や

数値的な証明などに精通することはほぼ無理であるし、それを追求する気は実はほとんどない。それよりもいかに実味のある表現をするかが、漫画家にとってもっとも腐心すべき点であり、そのために多くの時間を割いたからである。

宇宙的謎かけ

たとえまだ確実にない科学的事実の発見に関するものであっても、漫画家の描く未来世界ではす

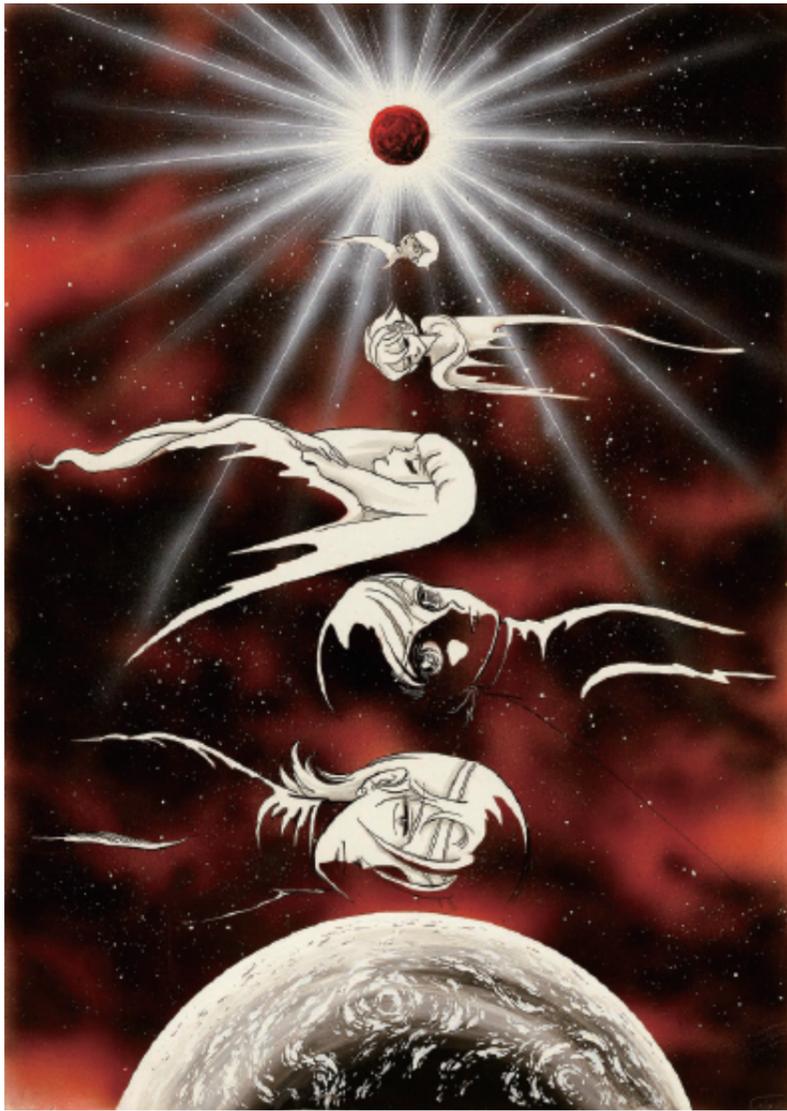


図3 『地球へ…』より「赤い星・青い星」 ©竹宮恵子

でに当然の事実として描かれたり、呪術的な要素やヒトの精神的な能力を加味してでも、科学者が決して行わない仮説を打ち立て、科学そのものが、もしかして間違っているかもしれない可能性に言及したりする。また、その仮説に答えを求めようとも思わない。起こりうるものがあればそれを起こしてみ、不可逆の仮説的歴史をつくることにより、「もしも」を現実を感じてもらうことができれば、漫画家の仕事はそこまで、答えを導くのは読者であるべきだからである。それを「楽だ」と考える人は多いが、読者が答えを導けるようになるためには、実はかなり巧妙な謎かけができなくてはならない。そ

れは「説明的でないのにちゃんと説明され、考えようとしていないのに考えさせられ、あくまで答えは読者が発見し、読者が必要とする結論に行きつく」、芸術的なまでの謎かけと誘導なのである。

巧妙な謎かけは宇宙的だ。見えてもいない力学、数学、物理学に加え、心理学やら哲学やら、文系であろうが芸術系であろうが、すべての要素を坩堝るつぼにぶち込み、魔術師よろしくかきまぜる。まぜた坩堝の中には必然的に一条のつながりが現われ、どのような順でそれを並べ読者の前に差し出すか、入れられた要素が並べべき謎かけを示唆してくれる。その示唆は入れられた要素が完璧であ

れば、熟練者・初心者問わず、その前に確実に姿を現わし、物語を成す。

拡がりや未知、シンプルな窓

ハッブルの宇宙望遠鏡が写した「ハッブル・ウルトラ・ディープフィールド」は、何度見ても飽きない画像だ。宇宙の大きさ、拡がりや年月、未知数、そして自分とは関係のないところで世界が生きていることを感じられる。「誰が私に言えるだろう、世界に拡がる輪がどこへまで届くかを」というリルケの詩を思い出し、限りなく、人間であること、これを知っていることを誇らしく思う。何の役に立つかと問われたら、具体的に何かに役立つことはあまり期待できないが、これの意味を知ることは、「こころ」というものを持つ人間にとって、実は必要不可欠の栄養素なのではあるまいか、と答える。

いま、この数秒の間も130億年前のビッグバンで星が生まれ、銀河の卵になり、想像もできないスピードで変化し成長する。その証拠がこの画像にはあって、永遠に出会うことはなくとも、自分にとってだけの時間でない時間があること、他者の絶対的多数を感じるができるのだ。科学者の多くはこんなことが重要だとは思わないかもしれない。当たり前すぎて、人に語る必要性を感じないかもしれない。だが、迷える羊には「世界はこれほどまでに大きい、だからお前はそこにいてよい。お前のすべきことをしなさい」という教えが必要なのだ。「ハッブル・ウルトラ・ディープフィールド」は、そういう意味で、まさに真理への窓だ。しかもシンプルきわまりない。ただ切り取って見せるだけで、多くのことを教えてくれる。宇宙が生成・膨張・収縮・消滅するものであること、自分とさして変わらないものだということを飲み込める人間を、1人でも増やすべきだと考える。

宇宙は、始まり終わるもの

終わりを考えて進むことは、40歳なかばを越えたころから考え始める。60歳になれば父母の死が身近になり、60歳になれば現実になるからだ。乗馬のためによく訪れたモンゴルには「よく生きるよりもよく死ぬ」という言葉がある。男たちが勇壮でなければならなかった昔と違い、急速に発展するモンゴルにおいても、現在ではこの言葉はまったく違った意味を持っていることだろう。終わりを考える、というのは、自分の仕事をどこで終わりとし、次へ進むのかという区切りを意味する。死ぬことをどう考えるかということではない。死へ向かって進んでいるのだから（死をはっきり確認したのだから）、すべてのことをはじめと終わりに分けて考えるということだ。そういう行動は意外に難しいことであるらしく、多くの人が「なぜ登ったのに降りるのか」「なぜせつかく得た結果を手放すのか」と聞く。答えは当然、「終わったから」に過ぎない。

よく物語を熱力学に例え、「エントロピーの増大がクライマックスを呼び、その崩壊によって熱的死が訪れ、現象（物語）は終わる」と解説する。現在では人々はその単純さ（エントロピーは勝手に減少しない）では満足せず、いかに物語中のエントロピーを増加させ、とてつもないスケールに持ち込むか——それによって社会現象（ヒット作を生む）を起こすかに血道を上げる。その行為が、実は何をしているのかをあまりよく承知しているとは言えず、外から見てるとかなりハラハラしてしまう。物語が終わったあとに平穏が訪れず、何かが壊れてしまったり、疑いが起こったり、神経的にざわついたり。物語の役割は何なのか、考えるべき時期なのかもしれない。

宇宙も物語も、人間も同じだ。熱的死はしばしの平和であり、かつ永遠

の持続が難しいものでもある。熱エネルギーは万物の現象を書き表わす重要なファクターだが、エントロピーを増大させる能力を持つ人間であればこそ、それを逃がす穴を開け、熱的バランスをとって全体を保たねば、現社会が熱的乱れを起こしてしまう。戦争や飢餓や、病的な社会などは、熱エネルギー・コントロールが悪くなっている、エントロピーの増大を招いているから起きると言えないことはない。

宇宙の穴はどこにあるのか

宇宙での単位は1億光年とかパーセクとか、天文学的数値になるため、普通の一般人はあまり実感を持ってその距離や時間を考えることはない。もし宇宙が閉じているなら、いずれは熱的死が訪れ、すべてが均衡して弥勒菩薩の現われる世界になるのかもしれないが、増大し続けるエントロピーをよそに、人々は「知ったこっちゃない生活」を続けている。宇宙が閉じているのかいないのかは、それほどの距離と時間の後のことであり、日々の生活にはまったく関係ないから当然なのだが、もしかして宇宙に穴があり、相殺する何か投げ入れられているならば、「世界は永遠」、もしくは「世界は永遠に近い」ということになる。人間に種としての終焉はあっても、宇宙は黙々と前進するというのだ。

実は人々は知らずに、この永遠をやっている。エントロピーの増大を、現実の日々は受け流し、別の要素に変え、少しばかり歪いびつであっても解決し進んでゆく。小さな爆発や崩壊とともになだれ落ちる現実問題を、ほかからの力や風穴で調整し、ソフトランディングをはかりつつ、いくつかの細かい問題にすり替えながら、人はいつしか最初立っていた場所とは違う位置にいる。それが現実したたかである。唯一言えることは、誰にもそ

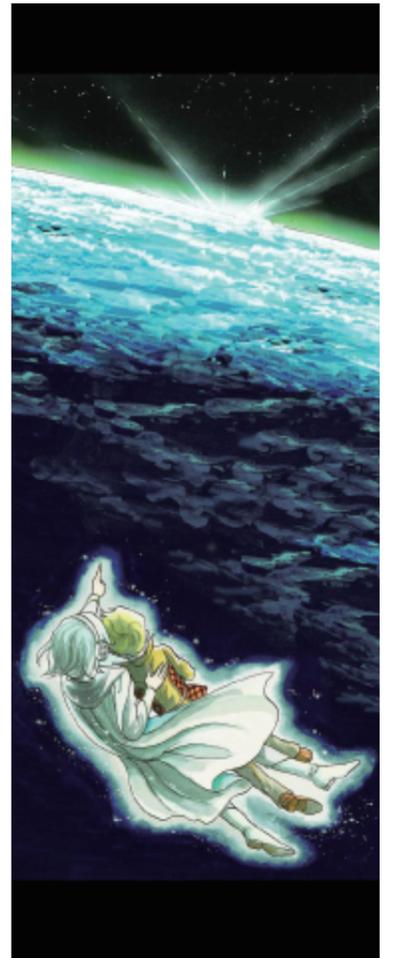


図4 『地球へ…』より「地平の彼方に」 ©竹宮恵子

の結果が確実に読めない、ということである。宇宙に穴が空いているかのごとく、現実には永遠なのである。

しかし物語は違う。物語は閉じていなくてはならない。物語全体がキメラ化しないためにも、閉じた世界の中でエントロピーを増大させ、ときどき穴を開けては別の要素を取り入れ、世界を冷やして終わりを延ばすが、最終的には熱的死をもって平和をもたらす、解決（終結）に至るのが本来の姿である。なぜ物語は終結するのかというと、終結によって安寧を読者に手渡し、物語から離れさせなければならないからだ。このように世界を閉じるだけで物語が現実とは違うものになると考えると、世界はやはり閉じていないように思える。これは肌感覚でしかないが、だからこそ、真理、かもしれない。